

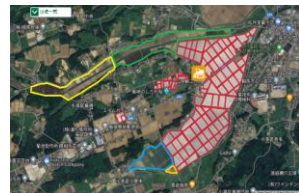
南相馬市小高区飯崎地区

1 想定するモデルとしての姿、モデルとする事項

- 病害虫防除暦に沿った病害虫防除の徹底により収量・品質の確保を目指す。
- 地域の土地利用の合意形成を図り、水稻、大豆、子実用とうもろこし、タマネギのブロックローテーションの適正な実施による収量・品質確保を目指す。
- 大豆所得の試算、水稻、大豆、タマネギのブロックローテーション体系の推進を行う。

2 生産概要（中心的な担い手の概要）

- 【R3年作付面積】水稻：32.7ha、大豆：27.2ha、タマネギ1.97ha
- 基盤整備事を契機に任意組織として設立した後、H31年に法人化。飯崎地区の担い手組織となる。
- 震災後、H26年に試験的に大豆を導入。H28年より本格的に作付けを開始し、徐々に面積を拡大（H28年：8.9ha → R3年：27.2ha）
- 水稻、大豆、子実用とうもろこし、タマネギでブロックローテーションを実施している。



飯崎生産組合作付ほ場

3 取組のポイント（モデルとして構築する取組）

<需要に応じた品種選定>

- H30年に「里のほほえみ」を試験的に導入。
- 収穫時の脱粒が少なく、作業性が良いことから、R3年に全面積品種転換。

<品目別のブロックローテーション実施、病害虫防除の徹底>

- 作期が異なる品目の組み合わせや、品目別で団地化・ブロックローテーションを行うことで、労力分散、適期作業を実施。
- 実証ほ場にて普及部作成の病害虫防除暦に沿った防除を実施。

<スマート農業技術を活用した大豆栽培>

- 自動操舵システム付きトラクタを使用した大豆播種、ドローンを使用した農薬散布により病害虫防除を実施することで、作業負担の軽減、効率化を実現。
- 営農管理システムによりほ場や作業の情報を一括管理。



ドローンによる防除及びR7年産大豆ほ場の様子

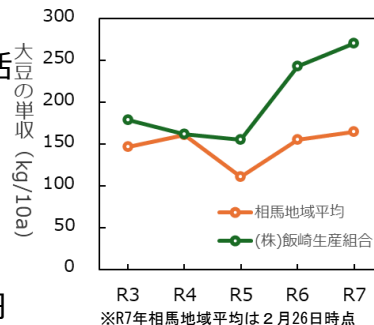
4 取組成果

<ブロックローテーション、病害虫防除の実施による収量確保>

- ブロックローテーションの実施、病害虫防除の徹底、スマート農業技術の活用により、相馬地域平均を上回る単収を確保。
- 実証ほ 全刈収量260kg/10a、大豆子実の虫害の割合 10.6%

<安定した農業所得の確保>

- R7年産の大豆収支（10aあたり）
収入 118,170円(交付金含む) - 支出 90,920円 = 所得 27,250円



5 残された課題

- 帰化アサガオ類等の難防除雑草の発生が増加しているため、体系防除の実証が必要。
- 水稻、大豆、子実用とうもろこし、タマネギの輪作体系における収益性の検証が必要。